

不動産市場異聞-59  
違う世界への共感性を

大東建託賃貸未来研究所・AIDX ラボ所長・麗澤大学客員教授 宗健

新型コロナ禍は、テレワークできるかどうか、という新たな社会の分断軸を明らかにしたが、分断には様々なものがある。それは、所得だったり資産だったり学歴・職業だったり、結婚への考え方だったり、変化への適応力だったり、と複雑に絡みあっている。

こうした分断は、人口が今後 10 年で 1000 万人以上減少し、平均年齢(平均寿命ではない!)が 50 歳を超え、世帯数も減少していく少子高齢化の縮小社会において、ますます複雑化するだろう。

そうした社会では、共感性が大切になるのではないだろうか。ただ、ここでいう共感性とは、目の前の人の感情を読み取り、寄り添う姿勢を見せるといったことではない。自分とは全く違った環境・状況に置かれている人たちの世界の存在に気づき、それを理解し、受容することである。

◎無邪気な無神経さ

新型コロナによる最初の緊急事態宣言が発令された際、品川駅港南口コンコースの朝の通勤時間帯の人波に対して「社畜」という言葉を使った人たちがいたようだ。あまり気持ちの良い言葉ではないが、「テレワークすればいいのに、なぜ会社に行く?」という素朴な気持ちでつぶやいた人もいたかもしれない。

こうした無邪気な無神経さは様々な場面で見られ、例えばクルマ社会の地方のアパートに対して「駅から遠い田んぼの真ん中にアパートなんか建ててどうするの?」というコメントもその一例だろう。

社会全体が比較的均質だった昭和の時代までは、こうした無邪気な無神経さはあまり目立たなかったと思われるが、社会が複雑化して、共通の価値観や体験が失われた現代では、ただ単に知らないだけ、自分とは状況が違うだけで、発した言葉が不用意に他人を傷つけることがある。そして、そのような不用意な言動をメディアに登場するコメンテーターが発することもある。きちんとした専門家は、基本的には専門外のことについてはコメントしないが、コメンテーターの専門性が担保されない状況でコメントしている時に不適切な発言が多いように思う。

◎エコーチェンバー効果

筆者の調査では、テレワークしている人の周りにはテレワークしている人が多く、テレワークしていない人の周りには少ない、という明確な違いがあることが分かっている。これは、テレワークしている人は、「みんながテレワークしている」と無意識に勘違いしやすいことを示している。これを「エコーチェンバー効果」と言い、同じような属性のひとたちの同じような意見を繰り返し見聞きすることで、社会への認知が特定の傾向に増幅・強化されてしまうことである。

大企業勤務の人は、仕事でもプライベートでも同じような属性の人と接することが多いだろうし、首都圏に住んでいる人たちは、当然だが地方に住んでいる人たちと接する機会は少ない。

しかも、スマホに表示される情報は、個々人の閲覧履歴によって最適化という名のもとに絞り込まれ、SNS ではそもそも自分の知り合いの情報しか表示されず、嫌いな人や見たくない情報をブロックすることができる。

だからこそ、自分とは違う状況に置かれている人たちがいる、ということに気づき、それを理解し受容することが必要になってくる。そのためには、自分とは異なる意見を積極的に調べ見聞きすること、自分とは考えの違う人たちと接することを意識する必要がある。

我々は、エコーチェンバー効果に気をつけ、それを常に破壊し続ける必要があるのだ。

(2022 年 1 月 11 日掲載)

#### ■プロフィール

そうたけし・87 年九州工業大学卒後リクルート入社。リクルートフォレントインシュア代表取締役社長、リクルート住まい研究所長を経て現職。博士(社会工学)筑波大学・IT ストラテジスト